

修士論文要旨

学籍番号 20GH204

人文社会科学専攻(コース: 現代共生)

氏名 渡邊 俊夫

論文題目 プラトン『パイドン』篇研究

本研究の目的は、古代ギリシアの代表的な哲学者プラトン(427-347BC)の中期対話篇の一つ『パイドン』篇の対話の分析を中心に、この世に生きている人間は魂と肉体で成り立っているという、いわゆる「心身二元論」に立って、プラトンが「死の練習」としての哲学(ピロソピアー)を死後において人間の「魂の浄化」という目的の実現とどのように結びつけているかという点を明らかにすることである。

『パイドン』篇では、この世に生きている人間は魂と肉体から成り立っているという、いわゆる「心身二元論」が人間理解の前提をなしている。ここで重要なことは、この対話篇では、この世に生きている人間を構成している魂と肉体の在るべき在り方が「自然本性」に基づいて、魂が肉体を支配し主導するのに対して、肉体は魂に支配されるという形で定められているという点である。だが、現実には、魂が肉体に縛り付けられ欲望や感覚によって惑わされ、魂の方が肉体に従属するという状況が生まれる。この両者の関係を自然本来の在り方に戻させるのは何か。その答えは、魂が知性の徳としての「知」(プロネーシス)を獲得することにある。すなわち、「知」を獲得することによって、魂と肉体との間に「自然本性」に基づく本来の在るべき関係が回復するというわけである。そのためには、この世で生きている間も、生涯に渡って魂ができるだけ肉体の束縛から離れて、魂それ自身としての存在になり、すなわち死と似たような状態になり、思惟の働きを最大限に機能させなければならない。哲学が「死の練習」であると定義づけられるゆえんである。

魂が獲得するとされる「知」というのは、「死の練習」としての哲学の営みによって、魂が真実在としてのイデア的存在に触れ、そのイデア的存在と同じように常に自己同一的な在り方を獲得するということを意味する。しかし、ソクラテスによれば、「知」を完全な形で獲得できるのは死後においてであるという。そこで、ソクラテスが死後の物語(ミュートス)を語るのに耳を傾けるのである。そこでは、生前の行いによって5種類の魂に分類される。その中で、「死の練習」としての哲学の営みによって「あますことなくみずからを浄化しきった者」が最善の魂とされる。死後において人間の最善の「魂の浄化」という目的の実現が、生前、真の知を求める者(哲学者)が生涯に渡っていそしんできた「死の練習」としての哲学の営みによって成し遂げられるというわけである。その最善の魂は、あの世(ハデス)で、完全な仕方で肉体を離れて、真の大地よりさらに美しい居所で、神々と共に永久に生き続けるというのである。つまりそれは、生前における「死の練習」としての哲学の営みが、死後において、「神的であり、清浄であり、まさに一なる形相をもつものと共存する」(83E)という魂の在り方を獲得するということである。このことはまた、「死の練習」としての哲学の営みによって、魂が、死後に、完全な形で「知(プロネーシス)を獲得した状態として捉えることができるであろう。

以上のことは、『パイドン』篇第一部における「死の練習」としての哲学の定義づけと深く関係しており、それは、『パイドン』篇全体の内容が一種の円環構造を成していることを示している。